

UDLM

10

vol.298

October 31st
2020

轍
の
か
た
ち

p.2-4 都市デザイン研究の蓄積
p.5 修士1年座談会
p.6 富山PJ完結

都市デザイン研究の蓄積

先月号の企画「研究お悩み相談ラジオ」にて、同期や先輩の経験値・研究方法を共有・蓄積できる仕組みが作れば良いのではという話が上がった。今

月号では、当研究室に蓄積された論文の中で、M1が自分の研究テーマに近しいものを読み、先輩方の着眼点や問題意識を共有してもらうことにした。

都市周縁部における空間、景観及び都市デザインの

方法に関する研究

著者：張 天新（2001）

研究の背景

都市スプロールによる都市空間の均質化や近代都市計画による都市空間の単調化といった問題を「都市周縁の喪失」と捉える。近年、生態、地域性、景観を重視する多数の都市計画・デザインの思潮が生まれ、都市周縁部における空間と景観に関心を集めている。

研究の目的

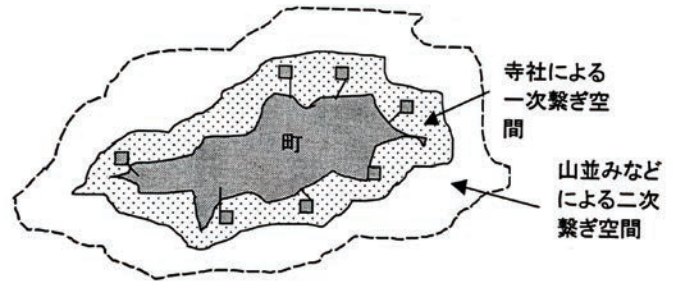
日本の都市周縁部については「周縁に力がある」など指摘されるように、ポジティブな特徴を示すのが特徴である。周縁部空間の形成過程、空間構造と景観パターンを解明することで、日本の伝統的空間理念と近代都市計画理念とが働き合った有機的都市デザインの方法を導き出すことを目的とする。

研究の位置付け・新規性

既往研究では都市計画および都市デザインの分野で都市空間の中での周縁部の位置付けが必ずしも十分認識されておらず、周縁部空間の構造と形態、周縁部における都市デザインの方法についての検討も乏しいため、周縁に焦点を当てたことに新規性がある。

研究の対象

時期：近代都市計画法が制定、実施された大正時代からこれまで
対象地：浮間、水元、六郷



日本の都市空間の周縁

選定理由：日本の近代都市で形成された有機的特徴を持つ周縁地区である。（近代都市の既存の成熟した都市周縁部であり、内縁部の自然空間と市街地空間がともに発達、複合的に形成されている。そして内外縁部自然空間は都市の中に呼び込む空間文脈としての働きがある。）

研究方法

資料調査、実地調査（ヒアリング、観察調査、写真撮影）、理論的推論を行った。

（担当：谷本）

歴史保全型まちづくりに対する行政関与に関する研究

-住民・市民関与との相互関係の変化に着目して-

著者：松井 大輔（2012）

研究の背景

近年見られる歴史保全型まちづくりに対する行政関与において、「過度の行政関与」や「打算的な行政関与」「形式的な行政関与」といった諸課題が見られ、歴史的環境の保全を取り巻く社会の認識や環境の急激な変化に行政関与のリテラシー構築が追いついていない。またこれまで「住民や市民の意見や活動を行政施策や事業にいかんにか反映させるか」というアプローチの研究が大多数を占めており、行政関与からの理論を再構築する必要がある。

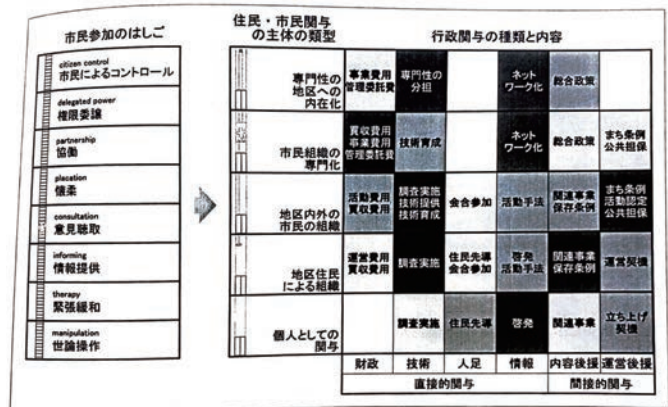
研究の目的

今後の歴史保全型まちづくりにおいて住民・市民の担う役割がさらに拡大し、住民・市民参加や官民協働がより一般的になっていくであろうことを想定し、ここに対する行政関与の実践的な手法を明らかにすることを目的とする。

研究の位置付け・新規性

既往研究では住民・市民の意見や活動をいかんにかまちづくり活動や行政の施策・事業に反映させるかに焦点を当てていたが、本研究では最終的に市民・住民関与に対して示唆を得ることを視野に入れつつそのアプローチとして行政関与に着目している点に新規性がある。

また行政関与に関する既往研究は行政関与の現状を論じていることに對し、本研究では過去に遡って時系列で行政関与を整理し全体像を検討し、それを踏まえながら事例研究を使いながら具体像にまで論を進めることに新規性がある。



研究の対象

八女福島・横浜内山手・新宿神楽坂の3事例における「歴史保全型まちづくりの展開経緯」を整理し、その中から「住民・市民関与と行政関与の相互関係の実態と変遷」を明らかにする。そして住民・市民関与と連動した行政関与の変容に着目して「行政関与の変容の動機と促進要因と利点」を分析する。

研究方法

行政関与の理論枠組みを仮説的に提示し、地区レベルにおける分析を通して理論枠組みの実践手法と効果を明らかにしていく実験的なアプローチを採用した。

資料調査とまちづくり関係者へのヒアリングを中心に行った。

（担当：河崎）

近代日本における参詣空間の創出に関する研究

- 明治期から昭和前期にかけての参詣をめぐる社会的文脈と空間づくり -

著者：永瀬 節治（2009）

研究の背景

地域のアイデンティティを見出し、育むことが奥行きのある地域づくりに必要であるが、地域の歴史や自然がそのアイデンティティになり得る。神社や寺院は各地域に受け継がれていて、かつ歴史と自然の両要素を含んでいる。また神社や寺院には、空間の文化的機能や役割、場所の意味といったものが相応に維持されている。そういった今日に受け継がれてきた空間の社会的価値を捉え直す必要がある。

研究の目的

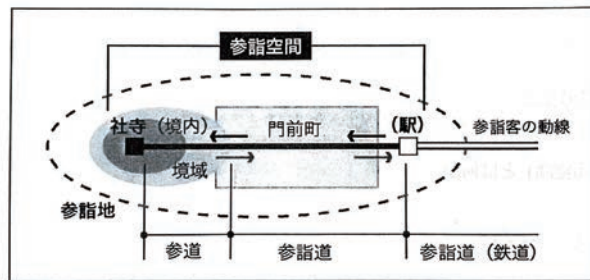
社寺境内の行動文化と、その受け皿としての「参詣空間」のあり方を軸に、その近代における機能を捉え、「どんな空間が創出されたか」、またその「空間づくりが地域社会においてどんな意味を持ち得たのか」を明らかにすることで、現代の参詣空間を手がかりとした地域づくりや、地域性に根ざした空間づくりへの示唆を得ることを目的とする。

研究の位置付け・新規性

既往研究では、門前町、境内、(鉄道と駅も含む)参道といった個々の空間構成要素の特に近世以前のあり方に視点を置いていたのに対し、参詣という目的を持った来訪者に共有される空間を一体的に「参詣空間」として扱い、特に近代における創出的側面に視点を置いている点。

近代において、公園や都市計画などの制度史や技術史の一端として把握されていた寺社を、「参詣空間」そのものの展開や、社会的・地理的文脈との関係に基づいて捉えている点。

近代の参詣行動については、社会・経済史、交通史、観光史といった視点



【図0-1】「参詣空間」の概念図

で研究されていたが、そこに空間的観点を導入した点。

以上の3点において新規性がある。

研究の対象

遠方から多くの来訪者を集める参詣地で、国家神道体制の元で、特徴的な参詣空間が創出されている事例として、近代（明治維新から昭和20年の終戦までの1つの国家体制が続いた期間）、特に鉄道敷設が活発化した明治中期から昭和15年の、出雲大社、明治神宮、橿原神宮、伊勢神宮を対象地とした。

研究手法

「社会的状況や地域的文脈を捉える」ことを目的に、文献調査・資料調査が中心である。

自治体史、神社史、鉄道事業者の社史、郷土史研究、県会・都市計画委員会の議事録、人物の文献資料、論考、新聞記事などが主な資料であった。

(担当：松坂)

タイ・バンコクの仏教寺院と周辺地域の保全課題に関する研究

— 現代的都市計画における宗教施設のあり方をめぐって —

著者：ウィチエンプラディト ポンサン（2012）

研究の背景

宗教施設は重要な役割を持ち、「生きた文化遺産」としての価値を持つが、現在はコミュニティとの関わりが希薄化し、宗教施設の保全をめぐる紛争が発生している。宗教施設を単独に保全することには限界があり、宗教施設の領域を超え、コミュニティや周辺地域と一緒に扱って保全をするべき。

研究の目的

以下の4点である。

- ・ 現行の宗教施設と周辺地域の保全に関する制度・仕組みを整理し、現行の制度・仕組みに見られる課題を明らかにすること。
- ・ 紛争の事例から、各主体の役割を検証すること。
- ・ 今後の宗教施設と周辺地域における総合的な保全政策について提言すること。
- ・ 現代的都市計画における宗教施設のあり方についての示唆を得ること。

研究の位置付け・新規性

既往研究では、仏教寺院以外の宗教施設（モスク・教会）について横断的に取り上げたものが少ない。また、保全における宗教組織の役割や管理責任における問題について取り上げたものがない。

それに対して、一つ目は、行政における宗教施設の管理運営や保全関連の諸制度、宗教組織における管理運営の権限及び責任の所在、信徒及び地域コミュニティにみる管理の仕組み等を通じて総合的に考察している点。

次に、宗教施設を単独に扱わず、周辺地域まで意識して一体的に考えている点。

次に、宗教施設の保全に際しコミュニティがどの程度の可能性を持ってい



るか検証している点。

最後に宗教施設が都市計画の中でどのような位置づけにあるべきか意識している点（これまでの都市計画は、宗教という個人的な信仰に触れることを避けてきた）

以上の4点において新規性がある。

研究の対象

仏教寺院、モスク、キリスト教教会といったバンコク都下の宗教施設755ヶ所…旧市街地中心。とくに仏教寺院（カンヤラ寺・ヤンナワ寺・龍蓮寺）についてケーススタディを行っている。

研究手法

宗教施設の保全に関する制度比較のため法律や条例、関連資料の精査を行った。

また行政が関わらない宗教施設の管理運営の仕組みの整理…仏教、イスラム、キリスト教関係者へのヒアリングを行った。

(担当：藤本)

住民主体による私有空間の公共的利用に関する研究

一支援制度を通じた住宅・庭先・緑地の公開を事例として一

著者：後藤 智香子（2011）

研究の背景

郊外既成住宅市街地における住環境の課題として、高度成長期に急拡大し既成市街地となった郊外住宅地は、都市圏域の拡大・地価の高騰・敷地の細分化によって高水準の住環境を維持できなくなっていること、人口減少や高齢化、住民ニーズの多様化・高度化によって生じた住環境に関する様々な新しい課題に対して、行政が技術的・財政的な制約から対応できていないことが挙げられる。

また、郊外既成住宅市街地における住環境の維持向上のための手がかりとしては、人口減少・高齢化・世帯規模の縮小を背景として私有の空き空間（空家・空き店舗・未利用地）が増加しており、こうした空き空間は適切に維持管理・活用されることで住環境の質を向上させる地域資源となる可能性があること、成熟社会においては、社会貢献や人の繋がりに価値を置く住民を中心に、自発的に私有空間を公開したいという声が増えることが予想されること、地域住民自らの手で地域社会の住環境に関する様々なニーズや課題にきめ細かく対応する「まちづくり」の動きが郊外既成市街地においても住環境の重要な担い手となっていること、が挙げられる。

研究の目的

郊外既成市街地における、支援制度を通じた住民主体による私有空間の公共的利用の取り組みを研究の対象に、その実態を分析し、成果と課題を明らかにすること。

研究の位置付け・新規性

既往研究では、私有空間の活用による住環境の維持向上に関する研究や、共有空間に関する研究が行われている。

それに対して本研究の位置付けは、住民主体による私有空間の公共的利用について、①特に郊外既成住宅市街地の住環境の維持向上という観点からの研究である。②私有空間を分類し、実証的、体系的に検討するものである。

まちづくりにおける歴史的用水の保全と活用に関する研究

著者：村田 康明（2002）

研究の背景

都市化により、多くの用水が有していた本来の多面的な機能と長い水利用の歴史の中で培われてきた地域との関係性が失われた。また、慣習による水利権が認められ、地域による管理を基本としてきたが、近年は農業人口の減少や農村部の都市化・混住化、住民の価値観の変化により、これまでの維持管理組織や体制が崩れつつある。このような地域との関係性を絶たれ、すでに地域に埋没、あるいはその危機にある歴史的用水が全国に多数存在している。本来の機能を失い、地域との関わりを絶たれた歴史的用水の存在意義を現代的視点から新たに捉えるための、まちづくりへの保全と活用の論理が必要とされている。

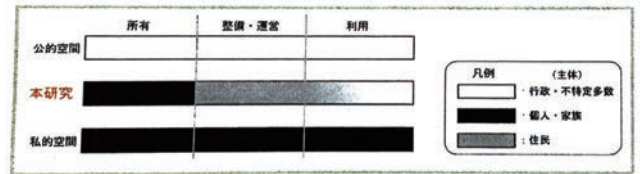
研究の目的

歴史的用水が置かれている状況を明らかにした上で、歴史的用水の保全と活用の実践的取り組みの事例及びフィールド調査から、歴史的用水の保全と活用という立場からのまちづくりの発展の可能性を考察し、その中で現代における歴史的用水のまちづくりにおける保全と活用の方法のあり方と水が果たしうる現代的役割を明らかにしようとしている。

研究の位置付け・新規性

既往研究では用水の水利用の歴史と生活との深い関わりや用水の本来持つ地域用水としての効用については指摘されているが、では具体的に、地域に埋没してしまっている歴史的用水をまちづくりへどのように活かすかについては十分な議論がなされていない。

歴史的用水の特性に焦点を当てながら、まちづくりへの視座を念頭に、成功事例の研究及び実際のフィールドの中からその可能性を見出し、歴史的用水をまちづくりの現場で活かすための方法論を探る。



③支援制度を通じた取り組みを取り上げるものである。

研究の対象

2000s以降に発生した（制度化された）公共的利用されている3つの私有空間。

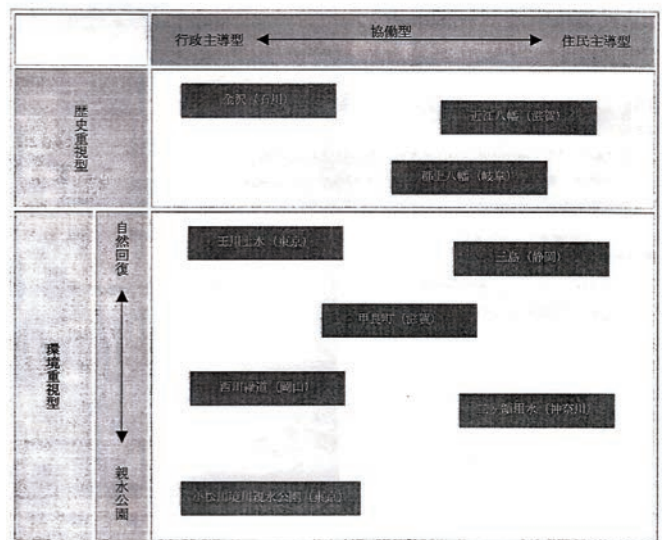
- ①建築空間（内部空間中心）：住宅、事務所、店舗など
→郊外既成住宅市街地における住宅の公開を通じたコミュニティ施設づくりに関する支援制度の事例として先進的な世田谷区「地域共生のいづくり支援事業制度」を選定
- ②建築空間（外部空間中心）：庭先、軒下、ファサードなど
→郊外既成住宅市街地における庭先公開を通じた街並み作りの課題への新しいアプローチとして戸田市「三軒協定制度」を選定
- ③非建ぺい空間：農地、緑地、駐車場など
→私有緑地の公開手法の中でも、所有者発意の誘発のしやすさ、住民による整備・運営を促す点、公開の持続性を担保する点で先進的な「市民緑地制度」を選定

研究手法（5章（市民緑地制度）のみ）

- ①全国自治体のアンケート調査
・市民緑地制度の各自治体での運用実態の悉皆的な把握
・市民緑地の整備運営に市民が関わっている事例を抽出
- ②整備運営に市民が関わっている20自治体への補足調査
- ③9つのケーススタディ
・「市街化区域に立地」「住民の多面的な利用のある」9事例におけるヒアリング調査

（担当：齊藤）

表 3.1.1 用水の保全と活用とその主導主体による事例の分類



研究の対象

- 三島市・金沢市（特徴的な成功事例）
- 小田原用水（事例研究の成果を踏まえた実践）

研究手法

文献、資料等の分析／ヒアリング／アンケート／フィールド・サーベイを行った。

（担当：鈴木）

修士1年座談会 一先人の研究に触れて一

今年の10月、都市デザイン研究室の6人のM1に、各々が読んできた論文の中身を共有してもらい、それを元に都市デザイン研究室の研究の特徴や今

後の自分たちの研究をどのように進めていくべきか、ZOOM上で座談会を行った。

一どんな問題意識から始まった研究か

谷本：自分が悩みとして持っていたのは、目的の部分。社会の役に立つものでなければいけないのではと考えていたので、どんな目的設定をしているのかを見たかった。自分が読んだ論文では「有機的な都市」が良いと思っていて、その設計手法を決めるための分析をしている。自分も**設計につながる研究**がしたいと考えていたのでそういった論文が見つけれられて良かったかな。

齊藤：自分が読んだ論文ではいわゆる**普通のなんでもない街を豊かにするにはどうしたら良いか**という問題意識があった。自分が卒制で選んだタワーマンションも、近代都市計画を極端に作られたところでヒューマンスケールな空間を作るにはという意識があったので、そこには共感できた。

鈴木：書いた人の背景を知ると理解が深まるという中島先生の話があったよね。謝辞を読んでみると、大学時代の経験やプロジェクトの体験から用水の魅力にはまっていき、この用水の魅力をまちづくりに活かしたいという想いから研究が始まっている。そういった**想いから研究が始まっている**ということを実感したかな。

河崎：学部の時も卒業設計しかやれていないから、シンプルに論文の書き方といった、論文の構成が勉強になったし、こういう論文を目指せば良いという像が明確になったね。

鈴木：論文のお作法を学ぶという意味もあるからそれも大事だね。

河崎：みんな話を聞いて、研究対象が一つの事例だけでなく、複数の都市や事例を扱っているものが多いと感じたかな。

松坂：複数の事例が選ばれている研究も、**事例の選び方のロジック**が通っていて、前提の部分がしっかり考え込まれているなど感じた。

齊藤：完成された論文を見るとそう感じるけど、謝辞を見ると一本に筋を通すのに苦労していることが伝わってきた。

一共通する視点、特徴的な手法

松坂：発表を聞いて、「**歴史**」とか「**保全**」という**視点が多い**ように感じた。

藤本：今回僕らが選んだ6つの論文のうち3つに「保全」ってワードが入っているね。それは西村先生の影響が大きいのだと思う。今は薄まってきているけど当時はキーとなるワードだったのかも。

松坂：文献調査・ヒアリングはやっぱり多い印象がある。空間的な研究だけど、GISとかはあまり使っていないよね。

藤本：マップがすごく多くて、地図作業が丁寧だと思う。自分の卒論では地図作業が少なく、そういう意味では空間に落とし込めていなかったという反省もある。

齊藤：悉皆調査でGISは使う印象。面白そうな場所を見つける段階の大き



▲ ZOOM 上で行われた座談会とその参加者

名前
学部時代の所属
研究対象

なスケールで用いる手法なのかな。

河崎：ヒアリングという手法は、工学部、都市工学の中でも特徴的なのでは。交通研とか解析研などはより理系的な分析が多いんじゃないかな。そういう意味では、今年は新型コロナウイルスの影響があってやりにくいってM2の先輩が言っていた。

松坂：ヒアリングは一步それと社会的になりそうだが、都市工たらしめている要素は何だろう。

藤本：ヒアリングを受けた上で、**目指すべき空間像まで示すところや、地図に落とし込むというのは実空間と紐づいていて、社会学とは異なるところになるんじゃないかな。**

松坂：目指すべき空間像を自分の研究で見失いそうになる時もあるけどそこは大事なポイントなんだろうね。

河崎：研究でも空間の話をしようとしているのはデザ研ならではのと思う。

一今後の修士研究に向けて

河崎：宮城先生が仰ったことでもあるけど、その後のキャリアにどうつながるか、自分が都市とどう関わって行きたいのかを考えたり、個人とまちの性質との関係について考えることが大事なのかな。

鈴木：永野先生に研究テーマを相談した際、これから10~20年先まで興味を持てるものを見つけられるといいねと仰っていた。**目指すべき空間像というのは、自分のスタンスを表明することにも繋がる。そういう自分のスタンスを研究を通して示していきたい。**

齊藤：最近研究のこと考えてると就活のこと考えてたり、研究のこと考えてると就活のこと考えてたり、境目が無くなりつつある気がする。そういう意味でも修士で何をやるかって今後に影響しそうだなと思う。

河崎：どの業界、どの会社かでもまちへの関わり方はセンシティブに変わってくる。自分のやりたいことが研究で明らかにしたいことに繋がっていて、それがどの業界・どの企業に入ってやるみたいなのに繋がってそうだね。

藤本：将来の話もそうだけど、都市工というかデザ研の研究は、自分の生育環境やルーツを問いただす営為たりうるのかもしれない。**自分の都市観を問い直すきっかけになるような修士研究ができればいい。**



▲座談会に向けて、デザ研のM1がそれぞれ読んで来た論文

「研究を通じて、己の都市観を見つめ直し、目指すべき空間像を示すこと」が都市デザイン研究の本質ではないかという議論でした。今回はM1有志でのZOOM開催でしたが、新型コロナには配慮しつつ、世代を超えて研究室でこのような議論がまたできれば良いですね！

富山プロジェクト完結、集大成のここを視よ

2018年に発足した富山プロジェクトは今年度で以て終止符を打つ。プロジェクトの成果を取りまとめた書籍が10月29日に発売される予定であるが、

その内容と見所について、プロジェクトメンバーである都市デザイン研究室修士二年の佐鳥蒼太郎さんにご紹介いただいた。

- 3年間に渡る活動、富山プロジェクトの諸相

文責：M2 佐鳥

富山プロジェクトは、富山市からの依頼により、市の「公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくり」をはじめとするコンパクトシティに向けた施策の有機的展開やその成果をまとめることを目的として、2018年に発足した。わずか3年間かつ実践を伴わない、都市デザイン研究室としては珍しいタイプのプロジェクトであった。

富山の「コンパクトなまちづくり」は国際的にも一定の評価を得ており、OECDによるコンパクトシティ政策に関する報告書の中で富山の事例が取り上げられている。プロジェクト活動の中でも、メルボルンとバンクーバーを視察し、富山との比較も行った。国内のみならず国際的に注目が集まる富山の「コンパクトなまちづくり」を富山プロジェクトでは従来の都市構造変化だけでなく、パブリックライフの観点からも評価を試みた。

さらにプロジェクトには都市デザイン研究室のメンバーだけでなく、富山大学都市デザイン学部の先生方や広場ニストでグランドプラザの運営を担った山下裕子さんなども加わり、より多様な視点を取り込んだ。

このようなプロジェクトの成果を取りまとめた書籍、「コンパクトシティのアーバンイズム コンパクトなまちづくり、富山の経験」が11月2日に発売される。ここからは、その書籍内容と見所を少し紹介したい。



11/2 発売の書籍

「コンパクトなまちづくり」の誕生

過去の富山は「もっともコンパクトでない」都市であった。富山市の「コンパクトなまちづくり」は日本で最も自動車社会化した都市の挑戦だったのである。その富山市がどのようにして「コンパクトなまちづくり」を実践するに至ったのか、明らかにしている。

現代では「コンパクトシティ」の概念は一般に広く知られ、その意義もある程度認められているが、当時はまだ新しい概念であった。そのような挑戦がなぜ市民に認められ、実際に走っていくことになったのか。多くのインタビューを交えながら掘り起こしている。新たな概念を導入することの難しさと同時に、不可能に見えることでも戦略を組み、丁寧に説明を重ねることで乗り越えられることを実感できる。

「コンパクトなまちづくり」を具体化する施策の展開

「串とお団子」という概念の歴史的変遷から始まり、重点的に施策の施された2つのコアエリアの変容、居住誘導と公共交通利用促進に向けた施策の展

開を明らかにしている。ここではソフトとハードの同時展開の様子を見ることができる。このような総合性が「コンパクトなまちづくり」には欠かせない。ここでは学生メンバーも執筆を行い、富山駅の周辺を佐鳥蒼太郎が、郊外部のお団子については森崎慎也が担当している。

総曲輪通り周辺の空間整備事業の展開を扱った節では、昨年度修了された仙石宇さんの修士研究の成果が十分に発揮されている。屋内広場の成功例として名高いグランドプラザとその周辺の再開発をきっかけとして、周辺に空間の変容が伝播していくさまが克明に描かれている。

「コンパクトなまちづくり」で生まれゆく都市生活のスケッチ

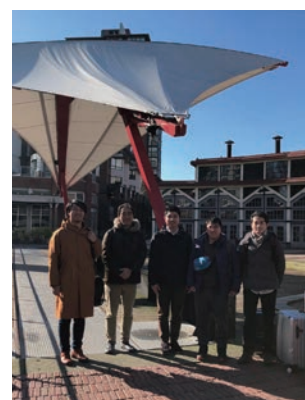
現在の富山のまちでどのような都市生活が生まれているのかを「人」に注目しながら検討している。富山大の高柳先生による、マクロな都市構造とミクロな都市の場所の評価を接続する試みに始まり、GPSを用いた調査から都心部での日常行動パターンを可視化している。さらに、グランドプラザなどの一連の施策の中で生まれた空間を舞台とした新たなライフスタイルを紹介している。

都心部における日常行動パターンを可視化では都心部を日常的に利用する方々にGPS端末を配布し、その生活をトラッキングさせていただいた。可視化の過程では山口知佳が作成したデータ解析用のプログラムや沼田康佑のGIS技術など、学生メンバーがもつスキルも大いに活かされている。

- プロジェクトを終えて

富山プロジェクトは短期間ながらも濃いプロジェクトであった。昨年度は頻りに富山に赴き、現地の調査を丹念に行った。11月には1週間ほど滞在する中で、メンバー全員での勉強会も行った。2月にはコロナ禍が迫る中で、バンクーバーを訪問し、海外の事例についても知見を深めることができた。これらを基に今年度に入ってから執筆作業を本格化していった。

富山の事例を深く理解するとともに、海外のまちあるきから書籍の執筆まで、自分だけではなかなかできない体験を多くすることができ、非常に有意義な経験となった。



バンクーバー視察時の集合写真 (2020.2)

COLUMN

BOOK OF THE MONTH



百年の孤独

ガルシア・マルケス
2019 木楽舎

推薦者
M1 藤本

南米の一族の栄枯盛衰 100 年史を描く傑作大河小説。死人が生者と交流し、同じ名前の男子が数十人登場する摩訶不思議な世界観に最初は違和感を覚えるが、血の呪いに翻弄される人々が織りなす叙事詩に知らず知らず引き込まれること間違いなし！

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！
<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/aj/blog/>



本郷のキオクを語り聞かす会

本郷 PJ では本郷の「キオク」を守ってこられた方と本郷らしさを考える会「本郷のキオクを語り聞かす会」を開催しています。今年度は「本郷館」をテーマに当時お住まいだった方にお話を伺いました。(M1 河崎)



ガイトウスタンド デビュー

池之端仲町通りで、街灯に取り付ける着脱式テーブル「ガイトウスタンド」を使った屋外飲食社会実験を実施し、コロナ渦の繁華街における新しいストリートの使い方を模索しました！(M1 植田)

LOOKING BACK AT OCTOBER

- 4th 本郷のキオクを語り聞かす会 2020
 - 9-10th 上野・湯島 ガイトウスタンド&テラス DEBUT
 - 17-18th 小高 菜園講習会
 - 17-31st 手賀沼 ヌマベクラブ
 - 23-30th 宇治 現地調査
 - 26th 富士吉田 勉強会
- 研究会会議 5th,15th,23rd

POSTSCRIPT

都市の何が好きでどう関わりたいのか。就活中とある社会人に問われた。研究も就活も自分の過去と未来を繋ぐツールなのだろう。(M1 松坂)